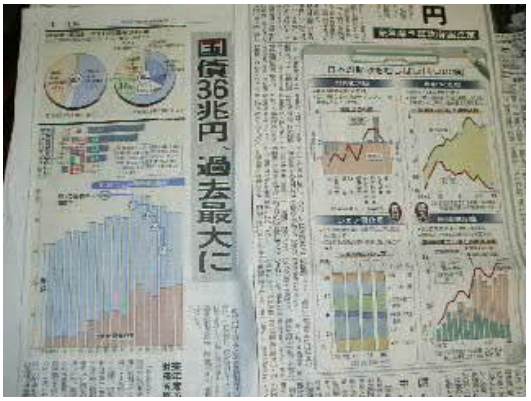
借金漬けの 2004 年度予算

政府は 24 日の閣議で 2004年度予算の政府案を決定した。一般会計総額 82 兆 1109 億円、一般歳出 47 兆 6320 億円であり、今年度当初予算比 0.4%増である。歳入の内訳は、税収が 41 兆 7470 億円で 0.1%減、国債が 36 兆 5900 億円で 0.4%増となっている。

04 年度予算案の最大の特徴は、「緊縮型」に編成されたものの、国債が過去最大の 36.6 兆円にも膨らんだことである。税収が歳入の 50%強にとどまり、不足額は借金である国債に大きく依存することになった。国債のうち、いわゆる赤字国債が 30 兆円と全体の 8 割にのぼり、まさに借金漬け財政であることがわかる。来年度末の国債残高は 483 兆円、国民 1 人当たりでは 378 万円の見込みという。地方の長期債務残高をあわせると 719 兆円、対 GDP 比は 143.6%にのぼる。21 日付の毎日新聞が「緊縮でも借金漬け」、朝日新聞も「借金漬け財政火の車」という見出しをつけていた。歳入に占める国債の割合、国債依存度は 44.6%と戦後最悪の水準であり、主要先進国で最悪の財政状況は悪化の一途をたどっている。



24 日付の日本経済新聞(夕刊)は、日本の財政をむしばむ「4 つの病」として、出費肥大症・税収欠乏症・シェア硬化症・国債依存症をあげている。国債依存症に関連して、「国債の大量発行は歳出にも影を落としている。元利払いのための国債費は歳出全体の 21.4%に上る。投資家の間で将来の返済可能性に不安が高まれば、金利が上昇して財政を一段と圧迫することになる」と指摘する。

それにしても日本財政は火の車だ。新聞には「構造改革、成果見えず」「展望見えぬ小泉改革」、そして「政治取引、家計直撃」「働き盛りに増税感」「高齢者には負担増の直撃」などといった見出しが目につく。

(12 月 30 日　記)